一隅を照らす

社会福祉法人
北光福祉会
会報
2020
夏号

表紙写真＝左上から時計まわりに　中庭にくつろぐ（内灘園）、春花でのサクランボ狩り（北光学園）、春の林（内灘園）、学校に行く（ひまわり学園）

一隅を照らす　2020 夏号　　主な内容

【新型コロナウイルス感染特集】

■コロナウイルス禍に遭遇して　潮逸民子……P2
■内灘園での医療支援活動を振り返って
　北見赤十字病院　院長　荒川雅二……P4
■厳しい抜いた五十七日間　工藤克雄……P6
■コロナ禍の中で想うこと　藤井康成……P9
■令和元年度事業報告……P10
■令和2年度事業計画……P11
■令和2年度組織機構図……P12
■人事異動／生活点描……P13
■ご芳志のお礼……P14
■後援会だより／あとがき……P16

コロナウイルス禍に遭遇して

社会福祉法人 北光福祉会
理事長　湯浅　民子

「いい知らせではないんですが」

との前置きで向陽園工藤施設長から、入所者の一人が新型コロナウイルス感染症に感染したようだ、との電話を受けたのは、オホーツクに遅い春が訪れようとする四月下旬のことでした。

よりによって向陽園に……。

まず浮かんだのはそのことでした。当法人には、児童養護施設北光学園、障害児入所施設ひまわり学園、そして障害者支援施設向陽園の三つの入所施設があります。北光学園とひまわり学園は児童施設で成長真っ盛りの元気な子どもが生活していますが、向陽園は障害の程度が重かったり、高齢で持病を持っていたり、健康には気を使わなければならない人が多く生活しています。従って、日ごろから衛生や入所者の健康に一番気を遣いながら過ごしているからです。

しかしそれゆえに病院にかかる頻度も多い。そしてこの時も、入所者がおやつを喉に詰まらせて救急車で病院に搬送され、誤嚥性肺炎の疑いで入院した病院で感染してきたのです。

「そうなの、それは大変だ。とにかく保健所の指示に従って進める以外に方法はないね。あと報道関係の取材があると思うから、それは必ず施設長が応対するようにしてください」

そんな指示をしながら、これから向陽園が直面するであろう試練の日々と、施設長の苦難を想像して胸が痛くなりました。無事に乗り越えさせなければ、と思う脳裏に、まざまざとよみがえってきたのが昭和の出来事でした。

昭和四十四年と昭和五十三年の二度にわたり、当時、夫が施設長をしていたひまわり学園は、法定伝染病であった赤痢の集団感染に見舞われました。旧園舎は今と違い、食堂も居室も大きな集団での共用であったため、瞬く間にほとんどの児童と職員に感染し、当時、遠軽町に設置されていた隔離病棟に収容されました。暗くて狭い部屋に大勢で詰め込まれ、入院とは名ばかりの、非人間的で悲惨なありさまでした。ほとんどの子どもの症状は軽く、いずれ治って元の生活に戻れるという見通しを持てるのが救いでした。

つらかったのは、世間の反応でした。「火元」（感染源はわからず仕まい）と新聞に書かれ、周囲から危険視され、忌避される存在となったのです。来園した客にお茶を出したのですが、誰も手をつけようとしない。唯一飲んでくれたのは保健所の職員でした。その光景が未だ忘れられないのです。

こうして日常を脅かす大事が起こったとき、施設長は大変なのでした。全てを二の次にして園内外の対応と、事態の収拾に当たらなければならない。時には、命がけと思えるほどに…。

令和の時代、そこまでは要求されないだろうけれど、大変であるのは間違いないことでした。

向陽園にはその日のうちに、保健所が来てくれ、感染者の入院先を確保して救急車で搬送してくれました。

今後の対応について話し合いを持ち、感染していない他施設や事業所は、向陽園との接触を避けたうえで、通常通りの生活や営業を行って差し支えないという指導を受けました。

夕方、オンライン形式で施設長会議を行い、当面の対応の確認と、指示を行いました。みんな動揺の中にありましたが、向陽園以外の施設や事業所の人たちも護らなければならないのです。

報道関係の対応が必要だろうと、原稿を作って届けると、すでに北海道からひな形がメールで届いていました。

解説文には、次の言葉がありました。〈全く謝る必要は無いと考えます。向陽園も遠軽厚生病院も被害者。どこにも加害者がいないはずなのに、感染＝悪のような風潮になっている〉

なるほどと救われた気持ちになり、力づけられもしました。

最初の感染者を隔離したにかかわらず、翌日また翌日と、発熱者が出て感染者は確実に増えてきました。

四月二十八日に、北海道が現地対策班を立ち上げて遠軽の出張保健所で対策会議が持たれました。道庁、オホーツク総合振興局、遠軽町、法人から六名が出席したその対策班の目的は、感染症そのものではなく、施設の事業を継続するためのバックアップであるという。そしてこの後に続く連休期間中、交代で町内に滞在し、その後も必要な支援に当たってくれるとのこと。そこまでしてくれるのだと思いました。

翌二十九日にはその一行と、保健所、医療関係者が向陽園を訪れ、詳細に中を見学し、打合せを行ったようでした。その結果、北見赤十字病院が、向陽園の一部を病院化して看護師と医師を派遣し、治療に当たることになったという報告を受けました。医師は日中のみだが、看護師は二名体制で夜間も常駐するというのです。

増え続ける感染者への対応をこの先どう進めればいいのか検討もつかなかっただけに、ありがたいことでした。病院化して医療スタッフが常駐してくれれば、大船に乗った気分でお任せできるのです。

日赤と向陽園の二人三脚は、その日

から三十三日間続くことになりました。

私の自宅は向陽園敷地内の職舎から二十メートルほどの位置にあり、毎朝、愛犬をつれて敷地内を散歩します。

赤十字のマークをつけた車が駐車しており、ときおりにこやかな看護スタッフとも行き合います。春が進む中の、頼もしくも心をこむ光景でした。

五月のこどもの日が近づきました。どこへも行けず、園内で過ごす利用者が不憫に思われ、アイスクリームを差し入れることにして地元のコンビニに注文に行きました。店主が出てきて、

「消毒液を使うでしょ。うちのストックがあるから使ってください」

とタンクに入った消毒液を渡してくれました。肩身の狭い思いをしていただけに、心を慰められました。

そのほかにも、道内の障害者施設や地域の団体、個人から衛生物資や義援物資、寄付金などが次々に届けられ、なかには十万円の定額給付金をそのまま回してくれる人もいました。

いずれも大きな励ましになりました。

日赤病院の荒川院長先生に会うことができたのは、五月十五日のことでした。感謝の言葉を伝えると、二月に北見でクラスターが発生したときに関わり、「若干のスキルを得たものですから」、と謙虚な口ぶりで言われ、さらに、

「向陽園も今月中には終りますよ」

「え、本当ですか？」

「大丈夫、終わらせます」

その言葉を私と傍らの工藤施設長は、どれほどの喜びをもって聞いたことか。見通しがあれば、頑張れるのです。

医療とは、こうして希望を持たせることも立派な治療ではないかとそのとき感じさせられました。

傍らに住み、つねに気にかかりながらも、部外者の私は用事がない限り園内へは自由に出入りはできません。窓越しに用を足したりしていました。

事務所はいつも忙しそうでした。四月から他事業所に異動した大杉元庶務課長を、事態が収まるまで向陽園で勤務することにしていました。

我が家からは、職員の動静が良くわかります。記憶のかぎり施設長と大杉元課長は、終息を迎えるまで十日返上で出勤し、業務に当たっていました。

施設長はつねに動き回っていて、あれこれ用務に追われています。せめて電話番なりとも代わってやりたいと思うのですが、事情が分からないものが関われることではないし、もどかしい思いを募らせました。

寄贈品の受入れ、職員の宿舎の手配など外部の用務は、法人本部でもあるひまわり学園が行っていました。

支援スタッフを補充する必要が出てきて、ひまわり学園からは千田副園長が、「感染対策のスキルを身に着ける機会になる」と申し出てくれ、その他にも、向陽園関連の通所事業所から二名を回すことになりました。大きな法人組織はこんなとき心強いのです。

道庁の報道対応の指導もあり、工藤施設長は取材には最低限の対応を貫いていましたが、新型コロナウイルスの場合、今でもそうですが、毎日のように各地の感染者数が発表されます。

陽性者が出て、明日、ニュースで「オホーツク管内、向陽園」と報道されると思うと憂鬱な気分になりました。感染症だから仕方ないと思いながらも、世間に対して肩身の狭い、どこか失点を重ねている感が免れないのです。

話は前後しますが、終息を迎え、オホーツク総合振興局にお礼のあいさつに伺ったとき、橋本振興局長さんが似たような感想を述べておられました。もしかしたら鈴木知事さんも、いや一国の首相や大統領も同じ気持ちを抱いているのかもしれないと思いました。

今や世界中が「感染ゼロ」を目指して命がけの競争をしているのです。

荒川院長先生が予言したとおり、五月の末には新たな感染者が出なくなり、六月に終息を迎えることができました。期間は短いほうで、感染者十一名も少ないほうでした。その要因のいくつかを挙げてみたいと思います。

先ずは、通告の一部を日赤病院の分院にし、利用者も職員も安心して療養や支援に当たれたことです。障害者は環境の変化が苦手で、特に言語のない重度の人にとっての入院は、当人も看護する側も大変な負担になります。その意味で今回、慣れた環境で治療や療養を続けられたことは幸いでした。

二点目に、園舎の環境が挙げられます。向陽園の園舎は二万坪の広い敷地に建っており、周辺に気兼ねはなく、のびのびと過ごせます。建物は平屋で、それぞれに玄関を持つ十のユニットから成っており、居室は基本個室です。

次ページで荒川院長先生が述べられたとおり、隔離や感染防止に適した条件を備えているのです。ユニット型園舎はこんな場合も有効ということです。

三点目は、関係する職員が前向きに結束しながら対応したことです。

その中心にあった工藤施設長の働きは大きい。支援課長経験者の彼は現場主義で、日ごろから入所者への気配りを欠かしませんが、今回も夜遅くまで残って入所者を気遣いながら対応する姿が見られました。その姿勢を、職員もまた倣っていたように感じました。

もちろん反省や改善すべき点もあります。感染のリスクがあって容易に近づけなかったとはいえ、現場施設の大変さを今少し組織全体で分かち合えないものかと感じさせられました。そのような体制を検討するまえに終息を迎えましたが、法人としての今後の課題の一つであろうと思います。

それでも赤病のあの頃と比べ、福祉を取りまく状況も、諸制度も充実し、人が大切にされる社会に進化を遂げたことを実感させられました。

それらもろもろに、深く感謝しながらのご報告といたします。（了）

向陽園での医療支援活動を振り返って

北見赤十字病院
院長　荒川　穣二

【はじめに】

このたび、遠軽厚生病院で発生し、向陽園に波及した新型コロナウィルス感染症（以下コロナ感染症）事案に、北見赤十字病院（以下当院）が医療支援活動として携わる貴重な機会を得ました。多くのことを学ばせていただいた感謝の気持ちを込めて、医療者として振り返ってみたいと思います。

【赤十字病院と災害医療】

当院は全国に九十一ある赤十字病院の一つで、オホーツク地域の拠点となる病院（地方センター病院）として北海道の指定を受けています。

赤十字病院の役割は、地域医療を担うこと、公的病院として救急医療や僻地医療を行うこと、看護師を養成すること、国内災害時に救護活動を行うこと、国際活動に協力することがあります。災害救護活動に関しては、日本赤十字社法として日本の法律に定められています。当院も北海道南西沖地震、阪神大震災、東日本大震災、胆振東部地震等に、今まで多くの救護班を派遣してきました。

【活動までの経緯】

向陽園入所者の一名が、四月十日から十三日まで（感染症指定病院の）遠軽厚生病院に入院しました（その後に遠軽厚生病院ではコロナウィルスによる院内感染が判明）。

退院後の四月二十二日に発症してPCR検査の結果陽性となり、四月二十四日、管内の感染症指定病院の一つである広域紋別病院に入院しました。

四月二十五日に同一ユニットにいた入所者一名が発症し、四月二十六日に遠軽厚生病院に入院となりました（四月二十七日にPCR陽性が判明）。

圏域の紋別保健所が四月二十七日に残りの入所者四十八名、施設職員四十名のPCR検査を実施して、入所者三名、施設職員（看護師）一名の陽性が判明したため、四月二十九日に入院調整のために向陽園を訪れる予定となりました。

その情報が、北海道から要請され当日、向陽園に同行する感染症専門看護師に紹介で、当院の感染症専門看護師にもたらされました。紋別保健所と協議を行い、また遠軽厚生病院の院長先生にも相談して、四月二十九日に私と当院の感染症専門看護師二名で、保健所に同行して向陽園を視察することとなりました。

【活動開始決定と方針】

視察の結果、コロナ感染症に関して向陽園の強み、弱みを以下のように考えました。

1）強み

・ユニット型で各個室が配置されて、ゾーニング（安全域、中間域、危険域等の区域分け）を行いやすい

・各部屋に窓があり、換気が十分にできる

・扉が多く、屋外から各居室へのアクセスが可能

・職員が工夫して（勉強して）、使命感を持って入所者に対応していた

2）弱み

・入所者から感染対策の協力が得られ難い、マスクを着用できない、手指衛生ができない、床を這う、共用物品を舐める、部屋でじっとしていられない、医療行為への抵抗

・一部の設備（浴室・トイレ・洗濯）が共用

・施設職員が濃厚接触者であると同時に感染リスク者

・職員は日常グローブのみ着用のため、防護具の着脱に不慣れ

以上から、以下の活動方針を（紋別保健所職員を通して）北海道の医療参事と直接交渉し、日本赤十字社法（第二十七条　2：非常災害時又は伝染病流行時において、傷病その他の災厄を受けた者の救護を行うこと）を根拠に当院として責任を持って対応することで許可をいただき、同日から活動を開始しました。

1）施設入所者

（知的）障害者のため入院等の環境の変化に対応できない可能性が高く、医療者側としても入院管理に関しては負担が多くなるため、鎮静剤や抑制帯を使用して対応することが想定されます。その結果、食欲低下、誤嚥性肺炎等をきたして重症となるリスクも危惧されます。したがって、早期に介入して陽性者に診療を開始することにより、施設内で管理することを目標とします。ただし入院が必要と判断した場合（食欲低下に起因する脱水症状、肺炎を疑う呼吸器症状等）には、当院コロナ感染症対策本部を介して遠軽厚生病院に依頼し、重症度に応じてオホーツクの感染症指定病院で対応。またコロナ感染症以外の病態に関しても、必要に応じて医師の往診により可能な範囲で施設内対応すること、緊急時には本部を介して遠軽厚生病院への搬送を検討することとしました（すべての入所者に当院の診療カルテ番号を発行して、往診患者として対応：日々の記録は向陽園で電子カルテに入力し、当院での閲覧が可能となる環境を整備しました）。

2）施設職員

日常の動線やゾーニングを含めた環境整備、感染防護具の着脱方法、手指

衛生を徹底すること等に関し医療者として情報提供を行い、さらに入所者の健康相談にも対応することによって、安心・安全な職場環境を提供することを目標としました。また、職員のメンタル的なことのニーズを把握することにも努めました（状況により赤十字ここころのケア班の派遣も視野に入れました）。職員で症状のある方は、PCR検査を行い、陽性者が出た場合は即日に入院対応とすることとしました。

3）救別保健所

情報（陽性者の日々の状況確認等）を共有し、PCR検査の検体搬送は救別保健所で担当していただく。

4）当院コロナ感染症対策本部

情報を共有し、必要物品、人的配置等を含めて病院として対応が必要な場合のサポートを行うこととしました（対外的な交渉等は病院として対応）。

【活動内容】

四月二十九日、PCR陽性の施設職員（看護師）は遠軽厚生病院に入院とし、三名の陽性入所者は食欲もあり呼吸器症状も無かったため、施設内で経過観察する方針としました。

同日夕方から、赤十字救護班第一班（看護師長一名、看護師一名、主事・事務作業者一名）を二泊三日の予定で派遣して活動を開始。翌三十日には、医師一名、薬剤師一名を二泊三日（宿泊は遠軽町のホテル）の予定で派遣し、陽性者三名の診察後に施設長さんに説明し、同意を得てからオルベスコ、アビガン（コロナ感染症治療薬）を開始しました。また三十日には、日帰りで感染症専門看護師二名、主事三名、臨床心理士一名（こころのケアに関するニーズ把握）も派遣し、ゾーニング、個人防護具の着脱法等の指導、必要物品の把握や補充、通信環境の構築、電子カルテの配置等、現場活動を展開する上での体制整備を行いました。

看護師長一名、看護師一名、主事一名を基本とする救護班は、二泊三日のサイクルで第十六班（五月三十一日）まで派遣しました。

五月九日からは、状況が落ち着いてきたため、向陽園での活動を八時三十分から十九時までとして遠軽のホテルに宿泊、夜間は電話で対応する体制に変更しました。

看護師は、小清水赤十字病院から第六班、第七班に一名ずつ計二名、置戸赤十字病院から第八班、第九班に一名ずつ計二名の派遣応援をいただきました。救護班は、五月十四日に退院して二十七日にPCR陰性を確認後に復帰した施設看護師と救別保健所の職員（救別保健所で短期間委託した臨時の看護師一名を含む）に業務の引き継ぎを行い、三十一日に撤収しました。

また状況に応じて、日帰りで医師計八名、主事計二十七名、PCR採取や採血検査のため検査技師計九名、感染専門看護師二名計九回、遠軽北見病院看護師計二名、こころのケア対応として臨床心理士一名計五回、日本赤十字北海道看護大学教授一名計二回の派遣を行いました。

この間、向陽園の職員をはじめ、遠軽町のホテル、日々の食事を調達した飲食店、遠軽厚生病院（有志で寄付を募り夕食を提供していただいた）遠軽町職員等、多くの方々のご厚意に、勇気と活力をいただき、感謝申し上げます。

【結果】

施設の陽性者は、四月二十二日から最後の陽性者が判明した五月二十二日まで、計十一名（施設職員二名、入所者九名）でした。施設職員二名は入院対応、入所者でオルベスコ、アビガンの投与を施設で開始した者は六名でした（うち二名は、病院からの退院調整に伴う施設のゾーニングのため、一時的に病院での入院対応としています）。

また予期せぬ陽性者は入所者一名で、誤嚥性肺炎で遠軽厚生病院に入院し、入院時のPCR検査で陽性が確認されました。

こころのケア班は、六月二日に活動を終えました。また六月三日に施設入所者の陰性確認目的でPCR採取を臨床検査技師が実施しました。

六月十七日に経過観察期間を終了し、六月十八日に終息を迎えました。

本活動を通して、幸いにもコロナ感染症に起因した死亡者はゼロでした。

【本活動を終えて】

活動場所が比較的近位で移動に時間を要さないため、多くの職員が活動に関わることができました（日帰りでの業務サポートが可能）。

任務を遂行し、帰還した職員の顔を見ていると、医療人として医の原点を見つめ直す機会が得られたこと、一つの目的に向かって協同すること、自ら考えて行動する自律性、地域を含めたチーム医療、そして周囲に感謝の気持ちを持つこと等、多くの宝物を得ることができたと感じています。

私自身、地方センター病院としての当院の重要性を再認識しました。また、医療機関間の連携や医療と介護・福祉の連携を各関係機関や地域住民の方々と前向きに話し合い、「オホーツクに住まわれている全ての人々に、安心・安全な生活環境を提供するための医療体系を構築すること」という新たな宿題をいただいたと考えています。

「すべては被災者のために」の赤十字精神の元、北海道にある片田舎の病院の活動でしたが、日本赤十字本社、北海道支部にもバックアップしていただき、強い気持ち・誇りを持って活動し、終えることができました。あらためて、本活動に関わった全ての方々に感謝申し上げます。

本活動に関しては、日本赤十字社の公式ホームページに公開しています。
https://note.com/jrc_kamenshio/n/n657f0000d67

戦い抜いた五十七日間

障害者支援施設　向陽園
施設長　工藤　克哉

入所者が入院先の病院で感染し、退院後に発症するという思っても見ない形で向陽園に新型コロナウイルス感染症の集団感染が発生し、道内十四番目のクラスターになりました。

向陽園にとっては「災害」というに等しい出来事でしたが、感染者は十一名（入所者九名、職員二名）で抑えることができ、六月中には全員完治して、無事に終息を迎えることができました。

ここに、感染から終息までの日々を振り返り、施設長としての思いを交えながら記して見たいと思います。

令和二年四月二十二日、院内感染した遠軽厚生病院から退院してきた入所者Aさんが高熱を出した時、

「コロナウイルスにかかったかもっ」

との思いが頭をよぎりました。

いつもは職員二名で通院に行くところをG支援員一名にしたのは、帰園後の隔離の付き添い職員を兼ねてもらうことを考えてのことでした。

診察後、電話連絡があり、

「コロナにかかっている可能性があり PCR検査をしました。帰園後は隔離して下さい。と言われました。」

とのことでした。

直ちに医務室と静養室を廊下側から密閉した隔離部屋を用意し、完全隔離の生活を開始しました。支援には通院時介助したG支援員がそのまま当たり、一人で検温などの様子確認と、食事や排泄の介助に務めてくれました。

二日後、PCR検査は「陽性」で感染が判明し、紋別の病院に入院となり、先ずは安堵しましたが、はかに感染していないかと不安に駆られました。

不安は的中し、翌日、入所者のBさんが夕方に発熱。K支援員介助で遠軽厚生病院、通院して各種検査とPCR検査を実施し、帰園後は隔離している通所事業所「遊友やすくに」棟で隔離し、K支援員が昼夜支援に当たりました。

次の日には入所者のCさんが発熱し、T支援員介助で遠軽厚生病院通院、各種検査とPCR検査を実施。帰園後は「遊友やすくに」棟で隔離し、同じように通院時介助したT支援員が昼夜支援に当たりました。

感染発生から一週間ほどの私は、とにかく無我夢中で訳もわからないままに対応しなければならず、手探りの状況の中で苦渋の決断や選択が繰り返され、不安の多いつらい毎日でした。

同じくこの時の職員三名も、感染の不安やリスクにおびえながら大切な初期対応に当たっていたのでした。

当然に感染が心配された三人でしたが、誰一人として感染しておらず、

「元気なので感染棟のホームで働きます！」と言われた時は、心の底から嬉しさがこみ上げ、「ありがとう！」と叫びたい気持ちでした。願もしくもあり、勤務シフト上とはいえ、偶然と思えるように当日勤務していてくれたことに感謝したものです。

後に、日赤病院の荒川院長先生から、

「初期の対応が良かった」と評価されましたが、この三人の働きは大なのです。

先の二名は感染しており、その後、全入所者と職員のPCR検査が行われ、新たに三名の感染が判明し、感染者は六名になりました。保健所からは

「入所者、職員も含め、陰性として出た人も疑陰性の疑いがあるため、様子観察の必要あり。」

と言われました。

私もこの六名の感染者だけで終わるとは思っていませんでしたので、「これからどうなるんだ。これからどうすればよいか。」と悩み、不安よりは先の見えない恐怖感に苛まれ始めました。

そんな思いを抱えながら足取り重く出勤した四月二十九日、保健所と一緒に、北見赤十字病院荒川院長先生が感染症専門看護師とともに向陽園を来訪されました。施設見学後に院長先生からここを病院化して軽症者をとりかばホーム内で治療します。医師と看護師を派遣しますので安心して下さい」

と言われた時は、

「助かった。これから陽性者が出ても大丈夫だ！」

と嬉しさと安堵の思いが交錯して、涙が滲んできたのを覚えています。

早速、その日から日赤のスタッフ三名が泊まり込みで入ってくれました。

それにより私は帰宅後も、「何かあっても日赤さんがいる。」という安心感を得ることができました。

三十三日間に渡り、二百三日の日程で代わる代わる笑顔で来園される看護スタッフさん方には本当に感謝しました。時には助言され、感染防止の指導を受けながら、向陽園職員と日赤看護スタッフが一心同体となって終息までの日々を過ごしたのです。

最初の検査で陽性が判明した方々は、症状は軽かったので安心しました。一名は職員のため入院、二名の入所者はしらかば中ーム内での治療生活となりました。これ以降も五名の陽性者が出ましたが、入所者については向陽園内と厚生病院入院で対処できました。

日赤病院、厚生病院、保健所がまさに連携し、協力し合いながら、治療や入院等手厚い支援に当たってくれました。

そうした中で私の中にまた不安が募ってきました。終息までには長くかかり、このままでは職員の疲弊が甚だしく勤務

が回らなくなるのではないか、との心配です。保健所、対策班、日赤スタッフ、理事長も交えた関係者の話し合いを持ってもらいました。

その時、日赤病院感染症看護専門看護師から次の意見が出されました。

「私たちが指導する防護服の着脱、消毒、手洗いの徹底をすれば、家庭に帰宅しての勤務は可能である。職員を施設内で囲い込むのではなく、ゆっくりと休む場所を設けることである。」

確かにと思いましたが、心中は「看護師さん方はプロであり、こちらの職員は素人なので簡単に対応できるだろうか？」と思いました。

しかし、職員が働きやすい環境を整備することが施設長としての責務であり、自宅に帰ることで家族に感染させるリスクも考えましたが、施設内での宿泊を解除しました。

自宅から出勤した職員の顔を見ると清々しく、これからも前向きに頑張ろうとする姿勢がうかがわれました。

ひまわり学園から職員を派遣してもらい、遠方やすぐに（通所）からも必要な人数を出してもらい、支援に当たる職員を増員することもできました。

このように自宅からの出勤に改めたことで職員が元気になり、さらに応援職員が確保されたことで、ずいぶん心が楽になりました。

何とかなるかも……、という先への展望が初めて開けて来たのです。

次に、期間中の入所者がどのように過ごしたかを書いてみます。

向陽園の建物は、平屋で本園には八カ所のユニット、別棟には二カ所のユニットがあります。

本園を、グリーンゾーン、イエローゾーン、レッドゾーンに区分けして生活をしてもらいました。感染が発生した、しらかば7ホームとしらかば8ホームがレッドゾーンで、建物の西端に位置しているのは好都合でした。

レッドゾーンの利用者は、散歩、入浴、トイレ以外は自室で過ごし、食事も自室で食べてもらいました。支援員が使い捨ての弁当食器を運び入れ、食べ終われば回収します。室を定期的に開け換気をし、清潔を保つために掃除は朝夕二回、消毒は頻繁に行っていました。医師や看護師の巡回診療も朝夕二回あり、支援員から熱やだるさ、食欲等の様子について伝えます。投薬は支援員が行いアビガン投与の一日目は十八錠を二回に分けて飲んでもらい、二日目以降は八錠を朝夕に分け投与し、セルベスコ吸入も毎日行い、二週間続けました。

高熱が出た場合はカロナール錠を投与するとびっくりするぐらい熱が下がりました。

皆さん、状況を理解しているのか驚くほど、素直に療養してくれました。多分、人間も動物ですので自然に自分の身体の中で何か異常が生じていることを感じているのでしょう。

PCR検査は全員に受けてもらいました。約十秒間、鼻の中に綿棒を入れてかき回されるため、辛かったと思いますが、何をするのか説明し、優しくホールドすると、声は出しても我慢して受けていました。殺人の方は我慢できずに寝転がってしまうため、次からは自室で採取しました。

一番最初に感染して、広域救別病院に入院した八さんは、一時重症に陥って人工呼吸器装着も検討され、私たちは半ば覚悟を決めていました。ところがある日病院から「おやつを届けてほしい」との電話が入ったのです。奇跡的に回復して食欲が出てきたのでした。そして五月二十三日、痩せて体力は落ちたけれども、一ヵ月ぶりに無事に退院することができたのです。

感染者全員が、無事に完治して元気になり、本当に良かったと思います。

グリーンゾーンの入所者は感染してはいませんが「疑陽性」のため、食事と散歩以外は自室で過ごしてもらいました。今まで各ホームを自由に行き来できた状態から、急に園内のあちこちに仕切りができて、入浴以外は廊下にも出られなくなったため不穏状態になる方が出てきました。

入所者間のトラブルや破壊行為が見られ始め、食事を摂取する量が減ってきたり、急な発熱や低体温、発疹や高血圧など、ストレスを言葉で伝えることができない方は、それを訴えるように身体症状として現れていました。

向陽園は一日のスケジュールはありますが、起床や就寝、食事、日中活動等を開始する時間はホーム毎に任せています。その中で入所者が一番楽しみにしていることとして毎日の散歩があります。以前は皆さん若かったので、全員に近い方々が春夏秋冬を通して約三キロ弱を元気に歩いていました。

高齢化と重度化が進んだ今も、距離は短くなりましたが継続しており、体力維持や自然と親しみながら歩く散歩は一番の楽しみでもありました。それができなくなってしまってからの影響は大きいものがあったのです。

医師に相談して暖かい日の散歩を許可してもらい、陽性者も元気な方は時間差を設けて散歩を実施するようになりました。幸いに向陽園は広大な敷地を有しており、グランドや林など格好の散歩コースがあります。散歩が解禁になり、外に出て太陽の光を浴びたり、日陰でゆったりと過ごすことができるようになると、皆さんだんだんと落ち着きを取り戻してくれました。

但し、自室でテレビやビデオ鑑賞、絵描き等個人の趣味を楽しめる方は、笑顔が多かったです。

食事は、普段から食堂ではなく各ユニットのデイルームで食べています。ガヤガヤした大集団で食べるよりは、普通の家庭のように少人数でゆったりと時間を気にせずに食べられるようにしています。そのことが今回功を奏したと思います。全員が食堂で食べていたなら、感染はもっと拡大したと考えられるからです。利用者にとっては、今回のことで家族との面会や帰省、外出等ができなくなったことも大きな出来事でした。

毎月の面会日で家族と外出し、食事をして楽しんでくることも出来なくなりました。週末には家族帰省されていた方も家には帰ることができません。何があったのか？を理解できず、仕方ないかもしれないけれど行動が規制され、利用者にとっては辛く苦しい日々でもありました。

ご家族にとっても心配と不安な気持ちで毎日を過ごしていたと思います。私自身、自分の子どもに置き換えると胸が詰まる思いです。

つくづく、新型コロナウイルスとは「悪者をいじめるとんでもないウイルスだ！」と感じてしまいます。

こんなふうに利用者もまた、それぞれの形で耐え戦い抜いたのです。

今回伴わることになった日赤病院や厚生病院の看護師を含めたスタッフから、次の言葉をいただいています。

「障がい者施設のイメージが変わりました。また、勘違いしていました。施設というけれど、皆さんは普通の家庭と同じように生活されているんですね。」

この言葉の意味は、私たち職員の障がいを有している方々への献身的な取り組みと、利用者主体の考え方で支援している姿を見て、病院スタッフの方々から患者さんへの関りにおいて原点を見直すきっかけになりましたと言われました。

私自身や職員にとってみても、つらい体験ではあったけれども、理解してもらう機会になり、良い意味で貢献できたかなぁと、嬉しい言葉でした。

新型コロナウイルス発生を通して係わったことで、相互の理解と信頼を深めることができたのです。

障害者支援施設における新型コロナウイルス感染は、向陽園が北海道では最初であり、それより一足早い三月二十八日に千葉県船橋市の「北総育成園」が新型コロナウイルスに感染してクラスターとなり、施設を病院化して対応しています。向陽園の場合も病院化して対応した二番目の施設になります。

遠からの話によりますと、厚生労働省より「何故、十一名で終わることができたのか？」と、分析されており、入所施設で発生した場合の新型コロナウイルス感染症対策の成功例として報告されていると聞きました。

厚生労働省から通達のあった「障害者支援施設における新型コロナウイルス感染症発生時の具体的な対応について」の内容等は、向陽園の取り組みが一部モデルになっているとのことです。

救別保健所は感染当初から、親身な指導や対応に当たってくれましたが、北海道が早期に「向陽園新型コロナウイルス感染症現地対策班」を立ち上げて、四月二十八日に第一回目の会議を遠軽で開催してくれ、連休中も職員が待機し、さまざまな形でバックアップしてくれたのは心強いことでした。

当初は、衛生物資の備えや貯えも少なく、不自由をしていましたが、早い時期に道東知的障がい福祉協会や道内の仲間施設、また地域の団体や個人から衛生物資や、寄付金、食品などの提供があり、金品だけでなしに大きな励ましもいただいたと感じています。

一般的に新型コロナウイルス感染では風評被害が激しいと問題になっていますが、向陽園に関しては、こんなふうに感謝を述べることができるのをありがたく感じます。

向陽園の現場では、支援職員の頑張りと後方から支える事務員などの連携、また法人内他施設・事業所から応援職員の派遣など、連携協力体制がしっかりと噛み合ったことが何より大きかったと思います。

ひとり一人が、非常事態であることを自覚し、厚がいを有している方々への日々の想いや使命感から、誰もが、「逃げない！辞めない！頑張るぞ！」と、全員一丸となって苦難の五十七日間を戦い抜き、乗り越えてくれました。感染の危険や不安な思いにさらされながら、体力的にも精神的にも辛い苦しい毎日を過ごしていたと思うと、「本当に、良く頑張ってくれた！ありがとう！」の一言に尽きます。

最後になりますが、私自身の家族の支えにも感謝しています。娘たち孫たちからの励ましのLINEや電話で癒され、特に、妻には苦労をかけました。妻は母の介護と、家業の手伝い、相談事業所まーぶるのモニタリング等「よくやるなー」とその体力には頭が下がりました。その上、私が帰宅すると一番最初に入浴ができるようになっており、直ぐに洗濯を実施、食事も消化の良い体力の付くメニューを選んで作ってくれました。そのお陰で五十七日間休むことなく出勤できたと思っています。「ありがとう。ご苦労さま。」をこの書面で伝えたいと思います。

皆さん、本当にありがとうございました。

コロナ禍のなかで想うこと

障害児入所施設　ひまわり学園

園長　藤井　康成

いつしか、私たちの目の前には「ニューノーマル（新たな常識）」、「ソーシャルディスタンス（社会的距離）」、「オンライン」などと造語や横文字が目立つようになってしまった。

子どもたちや職員また保護者・ご家族をはじめ全ての方が、感染予防と経済活動の二律背反が見え隠れするなかで不透明かつ混沌とした日々が続いている。

近くにあるいつもの場所に外出すること、園内での面会や家庭への帰省、集うことでリスクを伴う交流行事も含め色々な制約があり、多くの協力を頂いている。

本会報は主に「新型コロナウイルス感染症との戦い」であるが、私感としてコロナ禍のなかで想うことを綴りたい。

ひまわり学園には、ご承知のとおり法人本部の機能も有している。法人事務局長という立場からも、この五十七日間、刻々と変化する現場を、湯浅理事長、工藤施設長、太杉パオ八副管理者より伺い、離れているけれども法人本部として振興局をはじめとする関係機関との連絡調整や、多くの方々より心配や応援の気持ちが言葉や物資となり学園を窓口として寄せられ、善意の温かさに日々触れながら、中継して向陽園に届け続けた。

誰しもが経験したことがなく、未だかつてない状況下であったが、園長席から見える向陽園の外観は、いつもと変わらない。ちょうどその時期、学園や町内の桜は鮮やかに開花していた。

季節感と目の前にある大きな現実を対比してしまう弱い自分がいる。

「向陽園」として報道されて以降、ツイッターなどのSNSには、事実では無いこと、クラスターとして感染者数が増えていく日々に、あえて不安を世間に煽るようなツイートも目にする。

ひまわり学園や関連する児童通所支援事業所、地域生活の事業所も全て、向陽園と一括りになっているようでもあった。感染者、濃厚接触者、職員、またその家族に対して誤解や偏見、差別を行なうことは、決して許されるものではない。

「権利擁護とは何だろうか…」と自問もしてしまう。

長期化を踏まえるなかで、向陽園からの要請を受け、千田副園長と熟考を重ね、副園長の応援派遣に至った。

学園にとって、支援の支柱的存在が、約二ヶ月間不在となったなかで、今年度からマネージャーとして責任を持って仕事を推し進めている底田児発管、谷職員、柏葉職員をはじめ支援課、庶務課の職員が「どこで感染するかもわからない」などと、いわば街全体が疑心暗鬼にもなっているなかで、不安を抱えつつも感染予防を徹底し、安全、安心が第一義である子どもたちの日々の生活を護ること、気持ちに寄り添うことに一丸となった。

そして、何よりも四十四人の子どもたちは、二月下旬以降、通学校の休校や分散登校、簡略された卒業式や入学式、通学をはじめ様々な場面でマスクの着用、日常的な手指の消毒、検温や体調の確認の日々。

「緊急事態宣言」というワードが連日のようにテレビから流れ、すぐ近くに見える向陽園でのコロナ感染。そして、副園長の大きな存在が無いなかで、子どもたち一人一人が大きく違っていく環境や日常をどう受け止めていけばいいのか、とまどいや不安が大きかったと推察される。そのなかでも子どもたちなりに理解し、学園の日課や生活リズム、清掃を大きく崩すことなく信頼する職員とともに過ごす姿が見られた。施設であるが故に一般家庭とは違ってできたことなのかもしれない。

逆に、学校が再び動き始めた六月以降、型に合せないといけないなかで、体調不良や些細なトラブルなどと子どもたちの心の揺れが目立ってきている現状もある。

大きく社会が混乱した時、非力である子どもたちは、さらに弱い立場となってしまう。振り返りながらも次の一手としての備えが必要である。終わった訳ではないのだ。

最近、ふと思い出した本の一節がある。「鬼の眼」や「太陽の子」などで知られる児童文学者である灰谷健次郎さん（二〇〇六年没）の著書「ひとりぼっちの動物園」という短編集の巻頭にこのような文章がある。

あなたの知らないところに
いろいろな人生がある
あなたの人生が
かけがえのないように
あなたの知らない人生も
また　かけがえがない
人を愛するということは
知らない人生を知るということだ

管見だが、ここでの「知る」というのは見聞きだけではない。五感や心で感じることを指すのであろう。

「難」がすべてにおいて、先んじられている今だからこそ、「ひとりぼっち」と、灰谷さんが遺した言葉の重み、深みを強く感じてやまない。

社会福祉法人 北光福祉会

◇令和元年度事業報告◇

【法人の概況】

名　称　社会福祉法人 北光福祉会
設　立　昭和二十九年十二月二十九日
事務局　枝幸郡浜頓別町生田原字西三〇二番地七（ひまわり学園内）
理事長　湯浅　民子
評議員　九名
理　事　八名
監　事　二名

【令和元年度事業の概況】

五月、平成から令和に変わり、新たにスタートした令和元年度は、当法人においても変化の年になりました。六月の理事会において、過算四期八年に亘って理事長の任にあった星屋泰賢理事長が勇退され、湯浅民子理事長が七代目の理事長として就任しました。

期待に満れた元年度は、春先から激しい豪雨災害が発生し、明けて一月からは、中国武漢に発生した新型コロナウイルスが日本にも上陸して広がり、全国の学校が休校になったのをはじめ、人々の集まるすべての催しが中止になるという未曾有の事態となりました。

これを受けて当法人でも、三月に予定されていた第十回法人内研修会を中止という対応を取りました。

年に一度、法人職員及び役員、評議員、第三者委員などが一堂に会して行われる法人内研修会は、研修だけでなしに、新任職員や役員などの顔合わせ、新年度の事業の発表、親睦交流など、法人組織として一体感を得る大切な催しになっていただけに、中止になって、大事なことを忘れたまま、年度が終わってしまった感がいたします。

それでも秋から冬にかけては比較的平和な日々が続き、各施設や事業所は予定されていた事業や行事を行うことができました。それぞれのクリスマスパーティも、にぎやかに楽しく行われました。

法人の取り組みの主なものを次に紹介いたしましょう。

○役員の改選

前号で報告したとおり、役員改選により新たな役員が就任しました。役員名は十ページ掲載のとおりです。

○会議の開催

五月から三月までの間に、十回の理事会を開催し、それぞれに審議しながら事業を進めました。

○評議員会の開催

定時評議員会を六月に開催し、三月には、定款変更の審議で臨時評議員会を行いましたが、新型コロナウイルスの関係で書面での開催になりました。

○評議員選任解任委員会

竹中慶一評議員の急逝に伴い、令和二年三月三十日に開催され、新たに三人の評議員が選任されました。評議員名は十ページ掲載のとおりです。

○監事監査の実施

会計監査を年四回、預り金監査を年四回行いました。このほかコンサルタントである税理洋公認会計士事務所による会計監査指導を、年二回受けました。

○定款の変更

「経営の原則等」について地域社会に貢献する取組みとして「制度にない福祉を必要とする者等」と対象を明記しました。また「役員の定数」を常務理事一名から、一名以上の業務執行理事を置くに変更し、新たに「顧問」を設けることに変更しました。

○各種規程の変更と作成

「預り金規程」を、法人サービスを利用してない地域生活者についても管理対象に加えました。その他、公印規程、給与規程の変更を行いました。

○表彰の実施

法人として、次の表彰を行いました。

《北光福祉会功労賞》

・星屋泰賢　顧問

親の会会長、後援会会長、法人理事、法人理事長などを四十年以上に亘って務められ、施設と法人運営に貢献された業績に対して功労賞を贈りました。

《永年勤続表彰》

・佐藤和職員、清野満職員に対して、勤続十年の表彰を行いました。

《その他の表彰》

その他の表彰で、湯浅民子理事長が次の表彰を受けました。

・北海道知的障がい福祉協会長表彰
・日本知的障害福祉協会会長表彰

○グループホーム建物の完成

平成二十年十月から安国に工事を進めてきた僕ホームひがし館及び僕ホームにし館の建物が、令和元年六月に完成し、九月から使用開始しています。

○法人会報の発行

法人会報第一号「一隅を照らす」２０１９冬号を発行し、誌面において平成三十年度の事業報告・会計収支報告などを行いました。

社会福祉法人 北光福祉会

◇令和二年度事業計画◇

新型コロナウイルスの猛威が世界中を席捲し、加えて度重なる豪雨被害と、いつ安全な状況になるか見通しが立ちませんが、こうした危機も起こり得るという認識をもって子どもや利用者の生活を守り、新たな年度の法人運営に当たります。

法人運営については、法改正を受けて内部管理体制を整備し、危機に対応しながら適正な業務執行に当たるべく、令和二年二月開催の理事会において「内部管理体制の基本方針」を決定し、必要な規程を整備したところです。令和二年度はこれに沿って事業推進に当たります。

体制を強化するために、業務執行理事の複数配置や、管理職の増員、また各種委員会を設置して、現場の意見を吸い上げ、縦横のつながりを大切にしながら、法人運営にあたっていくこととします。

◇評議員（任期　令和三年六月まで）

評議員　中川　哲夫
評議員　廣島　賢子
評議員　三田　真美
評議員　宮崎　良公
評議員　三浦　義行
評議員　田中　齋
評議員　岡村　宏（新規）
評議員　馬場　洋子（新規）
評議員　町田美穂子（新規）

◇理事・監事（任期　令和三年六月まで）

理事長　湯浅　民子
理事　堤　茂樹（業務執行理事）
理事　工藤　克哉（業務執行理事）
理事　藤井　康成（業務執行理事）
理事　米内山邦子
理事　新山　史賢
理事　浅利　誠
理事　長谷川光夫
監事　加藤　政雄
監事　飯田　壮一

◇法人顧問

星屋　泰賢

◇第三者委員

加藤　敬蓉　　飯田　壮一
三浦　義行　　埴山　和成
熊谷　英雄　　宮崎　良公

○業務執行理事の複数配置

事業が多岐にわたるところから、業務執行理事を三名配置し、分担して法人業務を担い、事業の効果的実施に努めます。

新たな業務執行理事です。
堤　茂樹（主に児童福祉を担当）
工藤克哉（主に障害者福祉を担当）
藤井康成（主に障害児福祉と本部事務を担当）

○内部管理体制・内部組織の充実強化

新たに制定された「内部管理体制の基本方針」及び「組織規程」「評議員会運営規程」「理事会運営規程」「理事職務権限規程」等に沿って、内部の管理体制と組織の強化に努めます。

○副園長・副管理者の配置

特に障害者福祉について事業が地域に広がっているところから、副園長、副管理者等を配置し、管理と支援体制の強化を図ります。新たな管理者等は、次ページに紹介のとおりです。

○会議の開催

評議員会、理事会のほかに、内部会議として「経営会議」等を設け、また新たに「各種委員会」を設置し、それぞれの事項について広く意見を集約し、運営に反映させています。

特に今年度は、新型コロナウイルス感染等を受けて、リスクマネジメント委員会でのBCP（事業継続計画）の作成が急がれています。

○職員の働き方改革と福利厚生の充実

日々の業務を担う職員は法人の財産です。健康で意欲のある職員が、安心してできるだけ長く働き続けられるように次の改善を行ないます。

・定年の延長

定年の延長を検討し、実施します。

・有期職員の働き方改革

有期常勤職員の働き方を検討し、改善を図ります。

・人事考課の導入

人事考課制度の導入を検討し、納得して働ける体制作りを進めます。

・育児支援手当を新設

子育てしながら働く職員を経済的に支援します。満三歳未満の子どもが保育所を利用する場合、月額12,000円を手当として補助します。

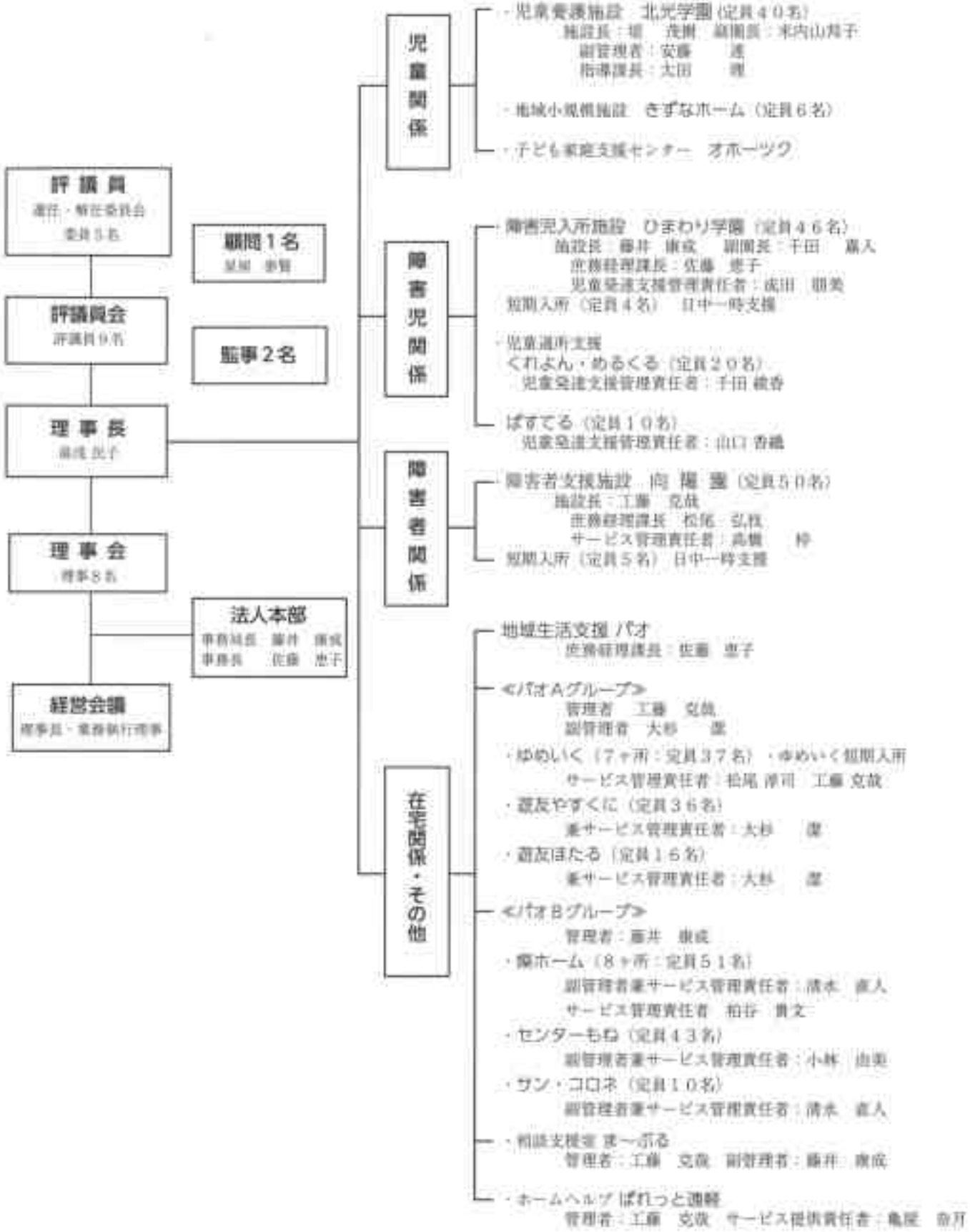
○第十回法人内研修会の開催

令和二年三月二十九日（日）に予定されていた研修会が中止になったところから、令和三年三月二十八日に振り替えて実施します。

○児童養護施設北光学園の定員変更

北光学園の入所定員を、四十五名から四十名に変更します。国の小規模化・地域分散化の方針に沿って行われます。

令和２年度　北光福祉会　組織機構図



副園長・副管理者の紹介

障害児・者福祉については、事業が地域に広がっており、業務の管理職はじゅうぶんに管理が届かない実態がありました。このため、令和二年度より副園長、副管理者を配置し、管理と支援体制の強化を図っています。

ひまわり学園　副園長
児童通所支援事業　副管理者
（兼支援課長・心理療法担当員）
千田　泰人

パオAグループ　副管理者
（兼放課後デイサービス管理責任者）
大杉　潔

パオBグループ
煌ホーム・サン・コロネ　副管理者
（兼サービス管理責任者）
清水　直人

センターもね
センターもね　副管理者
（兼センターもねサービス管理責任者）
小林　由美

新採用職員の紹介

令和二年度に当会採用となった新採用職員（新卒・経験者）をご紹介いたします。四月から三ヶ月が経過していますが、子どもたちや業務にひたむきに学び、向き合う日々です。末永くどうぞよろしくお願いいたします。

児童養護施設　北光学園
保育士　田中　翔輝
（くしろ専門学校　卒）

保育士　荒川　雄太
（オホーツク社会福祉専門学校　卒）

児童指導員
宮島真理子

障害児入所施設
ひまわり学園
児童指導員
田中　祐歩
（名寄市立大学　卒）

地域生活支援パオ
事務員
内野真由美

生活点描

畑と子どもたち

北光学園長　堤　茂樹

夏になると、北光学園では夕方や夜に野菜売りの少女や少年が、「野菜いりませんか？」と言いながら園長室や事務室にやってきて、格安の値段で白菜やきゅうり、レタス、大根、ジャガイモ、ズッキーニ、ミニトマト、なすび等を職員に販売してくれます。

これらの野菜は、学園の敷地内にある畑で子どもたちが心をこめて育てたものです。**写真**　各ホームで栽培する野菜は異なりますが、いずれも有機肥料を使った安全、新鮮、美味の野菜です。

春の畑起こしに始まり、種蒔き、水撒き、草取り、収穫をホームの子どもたちと職員で行います。職員が声を掛けて畑に出ることが多いようですが、自発的に畑に行くこともあります。

小学生の男子は落ち着きがない子が多く、職員に時々叱られているのを見ますが、畑の仕事は何故か集中して取り組んでいます。よく仏教の托鉢で行っている作務のように、農作業をしているときに無心の境地になっているのかもしれません。もちろん、全員が無心になれるという訳ではなく、喧嘩が出てきて、畑の横の排水溝の中を泳ぐオタマジャクシを見に行く子もいます。

野菜は職員だけでなく、給食を委託している業者さんにも安く買っていただいています。野菜の売り上げはホーム行事に使ったり、子どもたちの小遣いになります。もしかすると、子どもたちが「生懸命になる理由はここにあるのかもしれません。

野菜は売るだけでなく、ホームで調理します。炒め物にしたり、天ぷらにしたり、ゆでたり、漬物にしたりして、ホームのみんなでいただきます。職員にもお裾分けが回ってくることもありますが、お世辞抜きで本当に美味しいです！

みんなで野菜を長い時間を掛けて育てたという経験、みんなで調理し楽しく食事をしたという思い出、一生懸命働いてお金を得たという喜びは、子どもたちにとって一生の財産になるのではないかと思います。大人になって、畑のある田舎の風景を目にした時に、きっとこれらのことが懐かしく思い出されることでしょう。

ご芳志の御礼

寄付金

令和元年十月一日から、令和二年六月三十日までの間に、つぎの多くの皆さまから法人事業あるいは施設に入所している子どもたちや利用者に役立ててほしいとの趣旨でご寄付をいただきました。誌面を通じて厚くお礼を申し上げます。（敬称略）

《北光福祉会》
苗田建設㈱　あづま損害保険事務所　遠軽町　宮崎良公（遠軽）　野田勲子（音更）　匿名希望（札幌）
◇合計320,000円

《北光学園》
遠軽町社会福祉協議会　遠軽町生田原総合支所　遠軽信用金庫生田原支店　熱田洋子　㈲遠軽清掃社　㈱遠軽新聞社　生田原老人クラブ　㈱青池鉄工　遠軽青年会議所　大通工業㈱　くるみ里親会遠軽支部　浅利誠　㈱北州燃料店　栄内山勝太郎　栄内山邦子　遠軽ロータリークラブ　橋本政司　㈱アオイケ　長谷川光夫　大久保敏子　自衛隊遠軽駐屯地曹友会　青木眞弘　六車栄　遠軽厚生病院北厚労遠軽分会（遠軽）　近藤征一（湧別）　羽賀商店　土田浩子　櫻田靖子（北見）　永澤崇次　長谷川準（雲鶴）　美装販売㈱（紋別）　くるみ里親会網走支部　奥谷雅子　網走市女性保護の会　㈱ジョイン（網走）　屋塚泰賢（士幌）　北海道共同募金会（札幌）　松尾博子（小樽）　坂本健　横瀬兼二　牧川倫子（東京）　Nile Nerman
◇合計1,043,000円

《ひまわり学園》
㈱工藤電機　旭川トヨタ自動車㈱遠軽支店　㈲遠軽清掃社　アート美容室　㈱アオイケ　遠軽ロータリークラブ　吉川産業㈱　遠軽共同募金委員会　遠軽町　保科浩則　高橋新聞店　湯浅民子　加藤政雄　遠軽信用金庫生田原支店　遠軽町社会福祉協議会　三浦美知子　工藤美津子　㈱遠軽新聞社　自衛隊遠軽駐屯地曹友会　清水直人　苗田建設㈱　新山史賢　大通工業㈱　坂田直繁　佐藤洋哉　㈱レストランノースキング　東海林不動産㈱　佐藤英行　六車栄　北厚労遠軽分会　熱田洋子（遠軽）　大口義一郎（湧別）　森山重矢　北海道共同募金会（札幌）　横濱昌幸（福岡）　東野紀恵（大阪）
◇合計453,000円

《向陽園》
仲野静子　小野寺映子　熱田洋子　㈲遠軽清掃社　アート美容室　㈱アオイケ　遠軽ロータリークラブ　吉川産業㈱　新山史賢　浅利誠　焼茂樹　飯田壮一　遠軽町　保科浩則　坂田直繁　湯浅民子　藤井康成　熊谷英雄　長谷川光夫　加藤政雄　佐藤恵子　栄内山邦子　六車栄　三浦義行　遠軽町社会福祉協議会　小野園　遠軽信用金庫生田原支店　大通工業㈱　佐藤洋哉　高橋梓　佐藤富枝　匿名希望（遠軽）　馬場洋子（頴子府町）（社福）　雪の聖母園（丸形）　後藤きよみ　風屋奉賢（士幌）　荒木絹代（東京）　塚田玲子（紋別）　中塚和彦（湧別）　添内一希（新ひだか）
◇合計649,000円

《地域生活支援パオ》
湯浅民子　小野寺映子　安立加代子（遠軽）

センターもね
湯浅民子（遠軽）

蜂ホーム
土門喜弘（佐呂間）

ゆめいく
匿名希望（遠軽）

寄贈品

◇合計250,000円
令和元年十月一日から、令和二年六月三十日までの間に、施設や事業所に次の皆さまから物品のご寄贈をいただきました。特に今回は、手作りを含めたマスク、プラスチック手袋等の衛生物品をたくさん寄せていただき、大変助かりました。誌面を通じて厚くお礼を申し上げます。（敬称略）

《北光学園》
横山薫　西原勝義　加藤忠　横めぐみ　ヘアモードスタイル　安藤節子　森谷貴子　救世軍遠軽小隊　遠軽自衛隊曹友会　片岡理恵　藤本敬二　内田敏宏　仁原正幹　㈱だいいち　ウメダスポーツ　河原英男　㈱青池鉄工　ノースキング　北海電建㈱　㈲横本建設　長谷川清　太田好子　生田原給食センター　遠軽町　遠軽地区広域組合　消防署生田原出張所　自衛隊旭川地方協力本部遠軽地域事務所（遠軽）　村田好英　北見白樺ライオンズクラブ　置田靖子　土田浩子　北海道コカコーラ㈱北見事業所　鶴嶋優　山形幸恵　行幸恵　阿部みゆき　日本航空北見支店　湯本悦子　北見藤高等学校　北見洋菓子協会　岩崎佳奈　森良子（北見）　目黒真奈美（湧別）　㈱ながさわ（美幌）　佐藤果樹園（増毛）　㈱ホクビー（石狩）　㈱アクト警備オフィス　青池淳司　サンタさん　戸田建設㈱　札幌支店　ミルクランド北海道事務局　㈱セコマ　㈱コンサドーレ　JA北海道中央会共済広報課　奥村麻鈴　北海道児童養護施設協議会　生活協同組合コープさっぽろドックフードバンク（札幌）　佐藤敬子（豊富）　平田実（深川）　鹿野誠一　藤田智英（旭川市）　田中雄一（剣子府）　Total Fashion TADA（置戸）　㈱ホリ（砂川）　香原友美（音更）　㈱たかくら新産業商品センター（埼玉）　（一財）日本児童養護施設財団　全国児童養護施設組合　寄付サイト運営事務局　全国シャンメリー協同組合　大森絹子　門司一徹　㈱フレーベル館出版本部　（公財）毎日新聞東京社会事業団　読売新聞東京本社世界の野球グローブ支援プロジェクト　㈱ジェイ・ストーム　共立製薬㈱　㈱少年画報社ヤングキング編集部（東京）　斉藤正七郎（群馬）　地引弘行（神奈川）　大橋景子（岐阜）　文屋（長野）　ワールドメイト（静岡）　広尾町水産商工観光課（広尾）　小縄久司（弟子屈）　森秋子NPO法人アジアチャイルドサポート（沖縄）　㈲ダスカジャパン　クアウテモック（茨城）　東薫琴保護司更生保護女性（大空）　陸別歯科診療所（陸別）　花岡美和（佐呂間）　森田寛（滝上）　日本鍼灸組合（新得）　㈱ジョイン（紋別）　ほっともっと（福岡）

〈ひまわり学園〉
山本ミサ子　大通工業㈱　あづま損害保険事務所　本田貴子　藤井産業㈱　茶木建設㈱　ネッツトヨタ北見㈱　遠軽店　北見トヨペット㈱　細野石油㈱　秦野園店　北洋銀行遠軽支店　イト電商事㈱　佐藤商店　田中眼鏡店　小西ストア　森本麗子　きずなホーム　湯浅民子　織田佑美　高橋梓子　遠軽町　大神田佳代　阿部ゆり子　丸尾洋服店　アキュート　北海電建㈱　㈱山口産商　井上華江美　山谷敬三　江口千裕　橋本建設㈱　遠軽自衛隊曹友会（遠軽）　㈱三共後藤建設　天内工業㈱　長谷川善美　森谷権三　武井宏紀　北海道コカ・コーラボトリング㈱　会田勝男　葛木和博　北見地方法人会（北見）　廣島真美　山口香織　白田美恵子（紋別）　有路カズ子（美幌）　坂本美幸（斜里）　近江安香里　宅配クック1・2・3（湧別）　寺町由照（訓子府）　美深育成園（美深）　南川大（東川）　今井知佳子　旭川育児院　熊谷安奈（旭川）　森田初枝（別海）　中井雅幸　大山禄道　池田恭介　川東広子（帯広）　今村敏紀　セイコーマート　日清医療食品㈱　北海道（札幌）　近藤正臣（函館）　日本出版販売㈱　おすそ分けマスク（東京）　大阪四恵学園（大阪）　喜木元枝（長崎）　伊波毅子（沖縄）

くれよん・めるくる
かたつむりの会　小野寺健治（遠軽）　山口多美子　佐呂間町（佐呂間）

ぱすてる
兼田幸宏　佐々木ゆみこ　西村組　湧別町（湧別）

〈向陽園〉
光紀㈱　大通工業㈱　遠軽厚生病院　細野石油㈱　海野雅　峯田昭　天内工業㈱　小林幾子　佐藤富枝　仲野静子　樋口順子　遠軽町　保井浩則　山川悟　佐藤商店　遠軽厚生病院　くらしネットリンク　ノルディックファーム　青地鉄工場　北見トヨペット㈱　湯浅民子　浅利誠　清水直人　小林由美　北海電建㈱　ノースキング　匿名希望　梅澤尚明　横木建設㈱　理容ハナヤマ　㈱だいいち　茶木建設㈱　遠軽町職員有志　坂本二三夫　北光学園　北光学園職員親睦会　センターもね　ひまわり学園（遠軽）　遠藤正治　三田真美（佐呂間）　川地栄子（湧別）　滝口貞子　塚田玲子　島田和男　水野知一郎（社福）　紋別市百年記念福祉会（紋別）　清流の里（西興部）　飯田壮一　北海道コカコーラ販売㈱（社福）　川東の里（社福）　北陽会　工房とみさと　小柳中央金　北見赤十字病院（北見）　馬場洋子　もりの風（訓子府）　菅野智恵子（津別）　美幌療育病院（美幌）　西澤利秀（女満別）　サンライズ・ヨビト（網走）　斎藤久恵（新得）　清水旭山学園（清水）　後藤きよみ（士幌）　音更晩成園（音更）　オークル（芽室）　みどりの園　とまむ園（陸別）　藤盛より子　帯広慈光学園つつじヶ丘学園　高山健太郎（帯広）　はしどい学園　おんべつ学園　鵡が丘学園　ひかり自立支援センター（釧路）　佐々木スミ子　根室すずらん学園（根室）　三澤勝（東神楽）　雪の聖母園（月形）　途中スエ子　NPO法人ネクステージ　北海道保健福祉部　㈱モレーンコーポレーション　北海道保健福祉部（札幌）　千歳いずみ学園　最上のり子（千歳）　厚生労働省

〈地域生活支援パオ〉
遊友えんがる
堀田恵美子　梶田伸男（遠軽）

遊友やすくに
坂東耕自　井上華江美　大森和子　宝前光江（遠軽）

遊友ほたる
佐藤直美　坂本二三夫　平間彰（遠軽）　鈴木美智子（湧別）　岡島一恵（美幌）　岩村栄子（千葉市）

センターもね
高橋美史　安西貴美子　小林幾子　遠軽町消費者協会（遠軽）　クック1・2・3（湧別）　廣島真美（紋別）　袖日広志（美幌）　森岡陽子（滝上）

サン・コロネ
井上利典　片山明美（遠軽町）

蝶ホーム
有倉リヨ子　森田千春　福田進　安国町内会　民生委員生田原支部　西原弘　原田広和　我妻香苗　佐藤信子　子葉美佐世　柏谷貴文　高橋捷史　阿部政義（遠軽）　瀬場勝一　安彦好子　石原洋三郎（湧別）　鄧梓　山下常男　廣島真美　白田和博（紋別）　植月広志（美幌）　森田孝俊・初江（別海）　土門きみえ（佐呂間）　内海慶子（網走）　赤間尚美　黒川京子（札幌）　菱木勝（斜里）　会田勝男（北見）　加藤満（興部）　星屋幸賀（士幌）

ゆめいく
アオイケ　堀田恵美子　松本美千代　佐藤利江　清水直人　佐藤ゆかり　角谷房代　小林実　長岡春二　仲野静子　鈴木由美子　北岡優平　山田郁子　内野郁子（遠軽）　三品勲　金内ヨシエ（湧別）　阿部美代子　丸山守　折川重夫　石澤英一　川森修二　八木沼（北見）　有路カズ子（美幌）　菊八ナ子（大空）　岡本タミ子（訓子府）　歳永俊江（佐呂間）　津島由則（雄武）　須藤利昭（札幌）　佐久間かつ子（石狩）　中谷安光　白川弘行　白川陽子（南館）　岩村栄子（千葉）　大場琦子（埼玉）

まーぶる
縄陸博　阿部ゆり子（遠軽）

ぱれっと遠軽
安村まり子（遠軽）

ボランティア

次の皆さまから、ボランティアをいただきました。

〈北光学園〉
ホテルノースキング　えんがる商工会青年部　陸上自衛隊遠軽駐屯地曹友会　救世軍遠軽小隊　真鍋こ夫妻　鹿内忠嘉　荒川雄太（遠軽）　北見地方法人会　北見白樺ライオンズクラブ　オホーツクレオクラブ　飯田壮一（北見）　小田島譲（網走）　田中祐輝　佐々木優衣　阿部実央子（釧路）　鹿野誠一　山本秀勝（旭川市）　戸田浩子　フレッド・カプマン（札幌）　ワールドメイト（静岡）

〈ひまわり学園〉
北海道紋別養護学校　ひまわり学園分校有志　保科通子　保科浩則　木下敬裕　遠軽高校ボランティア部　陸上自衛隊遠軽駐屯地曹友会　青野恵美子　中村理恵子　太田亜依里　佐藤恵子（遠軽）　北見地方法人会　井田みのり（北見）　山口香織（紋別）

後援会からのご報告とご協力のお願い

児童養護施設北光学園の「北光学園後援会」と、ひまわり学園、向陽園、グループホームをはじめとする障害福祉事業関係の「ひまわりの里後援会」に、令和元年10月1日から令和2年6月30日までの間に次の皆さまから会費、寄附等のご協力をいただきました。誌面を通じて厚くお礼を申し上げます。今年は「ひまわりの里チャリティバザー」は中止になりましたが、この後も、ご支援やご協力をよろしくお願いいたします。（敬称略）

北光学園後援会

田中勝利　三浦義行　佐藤洋哉　青野シマ子　堀茂樹　青山葉子　上村美和子　太田理　米内山邦子（遠軽）　遠藤和子　斉川悦子（北見）　横田行（札幌）　高橋敏治　美（旭川）　会費・寄付金合計　１９５，０００円

ひまわりの里後援会

豊代里病　旭川トヨタ自動車㈱　新山貴雅子　㈱アオイケ　望月利昭　㈱ウエノ　㈱遠軽清掃社　笹田建設㈱　東海林不動産㈱　遠軽町社会福祉協議会　石川清治　松原建設㈱　㈱山口屋商　㈱工藤電機　イト電商事㈱　細野石油㈱　ネッツトヨタ北見㈱遠軽店　吉川産業㈱　小野園　茅木建設㈱　アート美容室　遠軽通運㈱　光配㈱　佐藤洋哉　我妻香苗　本田典子　佐藤富江　浅井宏實　栗原久子　林明男　名雪美加　仙頭吉里子　佐藤喜美　遠軽信用金庫生田原支店　工藤克哉　小野寺映子　粕谷さつ子　大杉潔　谷千洋　清水直人　瀧浅民子　伊藤美千子　大柳不二夫　鍋田祐美　佐藤元　中村理恵子　安立加代子　藤井康成　佐藤恵子　匿名希望（遠軽）　㈱渡辺組　川地栄子　岳上光雄　篠塚勝一　松浦敬貴（湧別）　土門春弘　遠藤正治（佐呂間）　山下常男　藤島真美　鹿田和男　水野知一郎　塚田玲子　海口貞子　白田和博（紋別）　西田光子　中央防災㈱　岩崎久衛　㈱小柳中央堂　松田淑江　井関利男　渡辺裕明　船場弘治　尾藤節明　会田勝男　㈱柴伸　田岡久治　堀忠男　長谷川喜美　細木亜由美（北見）　岩本静夫　㈱佳能合設計室　秋保康治　逆中スエ子　須藤利昭　吉田亮介　吉田さやか　㈱川西製紙所（札幌）　佐藤秀夫　村田清一（大空）　後藤きよみ　星屋泰賀（士幌）　草原智子（函館）　㈱池田商店（雨竜）　加藤満（興部）　馬場洋子（訓子府）　内海進（網走）　野田勉子（音更）　中井雅幸（帯広）　長田わか子　橋京子　㈱ジェイアイシー（東京）　西川千恵子（奈良）

令和元年度ひまわりの里後援会決算報告

項　　目	金　　額
会費・寄付・事業収入	2，314，240円
前年度繰越金	3，936，155円
支　　出	35，475円
差引合計（次年度繰越金）	6，250，395円

社会福祉法人 北光福祉会

〒099-0622
北海道紋別郡遠軽町生田原安国302番地7
☎0158（46）2120・FAX 0158（46）2080
HP：http://www.hokko-fukushi.or.jp/office/
E-mail：office@hokko-fukushi.or.jp

●児童養護施設 **北光学園** ☎0158-45-2233・FAX45-2041
地域小規模児童養護施設 **きずなホーム** ☎0158-45-2206
●児童家庭支援センター **子ども家庭支援センターオホーツク** ☎0158-45-3211
●障害児入所施設 **ひまわり学園** ☎0158-46-2020・FAX46-2080
●児童発達支援・放課後等デイ **ぱすてる** ☎01586-8-7300
くれよん ☎0158-46-2020　**めるくる** ☎0158-46-7510
●障害者支援施設 **向陽園** ☎0158-46-2525・FAX46-2277
●地域生活支援事業所 **パオ** ☎0158-46-2120・FAX46-2080
パオ遠軽 ☎0158-42-3611・FAX 46-3384
●共同生活援助事業 **ゆめいく**（8ヶ所）　**縁ホーム**（8ヶ所）
●生活介護事業所
遊友やすくに ☎0158-46-2277　**遊友えんがる** ☎0158-42-3389
センターもね ☎0158-42-3720　**スペースもね** ☎0158-46-2120
●就労継続支援B型事業所
遊友ぽたる ☎0158-46-2460　サン・コロネ ☎0158-46-7077
●居宅介護事業所 **ぱれっと遠軽** ☎0158-42-3811
●相談支援事業 **まーぶる** ☎0158-46-3383

編集・発行：社会福祉法人 北光福祉会　理事長　瀧浅　民子

あとがき

「一縷を照らす 2020 夏号」は、新型コロナウイルス感染症の特集号となりました。施設が感染し、クラスターとなったことは貴重な経験であり、その経験を参考にしてもらいたいとの考えからです。

当法人の場合、いろいろな好条件に恵まれていたと改めて感じさせられます。その一つに季節がありました。やっと訪れた北国の美しい春、それは生きとし生けるものに命の喜びをもたらす季節でもあって、そのさなかに感染症と戦うことができたからです。あまり、暗さやつらさを伴わずに思い返されるのは、そのせいでもあるのでしょう。

みんななかよくいっしょ、という人とのコミュニケーションが「密」を避けるという目的の下に許されなくなっています。これまで行ってきた行事や楽しみの数々。あれもこれも条件には合わなくて、一体この先、どのように世の中は変わって行くのかと心配でなりません。そしてそのことが経済にこれほどの影響を与えるとは想像できませんでした。所詮、世の中は人と人とのコミュニケーションによって成り立っていたということでしょう。

止まない雨はない、明けない夜はない。いずれも人の世の試練はやがては去っていくと教えているのですが、そのあとにはどうやら、これまでにないものが待ち受けているようでもあります。

まだまだ予断は許さず、これからへの不安は大きいけれども、人の叡智は、コロナウイルスという未曾有の試練をも乗り越えていくと信じます。文明の進歩や科学技術の発達は、そのためにこそ進化してきたはずなのですから……。

（瀧浅）